

事後評価報告書(日本-スイス研究交流)

1. 研究課題名: 「IgA 腎症の病因における O 型糖鎖修飾 IgA 分子と形質細胞延命因子 APRIL の役割」

2. 研究代表者名:

日本側: 順天堂大学大学院医学系研究科腎臓内科 教授 富野 康日己

相手側: University Grenoble-Alpes, INSERM, U823, Albert Bonniot Institute Full Professor Huard
Bertrand

3. 総合評価: (S)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

本研究課題は、IgA 腎症に関する臨床・研究経験の豊富な日本側と、形質細胞延命因子 APRIL に関する豊富な知見を有するのみならず、抗ヒト APRIL 抗体を開発したスイス側とによるもので、絶妙な協力体制であったといえる。この結果、抗ヒト APRIL 抗体を用いた解析から、ヒト IgA 腎症が口蓋扁桃胚中心の B 細胞における APRIL 過剰発現と密接に関係すること、また、スイス側から提供された APRIL 阻害抗体を日本側が確立した IgA 腎症自然発症モデルマウスに与えることによって、発症早期の腎症進展が抑制されることなどを明らかにした。これらの成果は、IgA 腎症患者口蓋扁桃における APRIL を中心とした免疫異常の一部を明らかにするとともに、口蓋扁桃摘出術、および APRIL を標的とした新規治療法の開発に理論的根拠を与えるものとして、極めて高く評価できる。日本、スイス両グループの共著による原著論文4報、学会発表も9件と着実な成果公表も実施されており、研究室ごとの論文が多数あることも、共同研究として高く評価できる点である。

(2)交流活動の評価について

本研究課題の実施を通して、双方向の人的交流も非常に活発になされており、セミナーやシンポジウムへの積極的な取組みも認められる。また、スイス側研究者が日本に長期滞在して研究に取り組んだことは、技術修得という観点で交流の成果と評価できる。

(3)その他

双方の技術的な交流、試料の提供が対等に行われているといえ、治療応用へつながりうる成果が得られたことは特記に値する。これまでの実績から、今後も継続した研究交流が期待できる。